ランドスケープと植物(系)教育の広がり

Development of Plants and Materials Education for Landscaping

興水 肇* *Hajime KOSHIMIZU*

1. 特集の意義と目的

「最近の新人は植物を知らない。学生時代にまじめに植物のことを勉強しているのか。ちゃんと教育しているのか」という意見を聞く。努力不足や熱意不足を言われているとすれば、教育側の人間としては謝るしかない。しかし反省するだけで済むのならこの特集は必要ない。

造園の範囲が拡大し、業務の内容も多様化した今日、職能人としてのランドスケープアーキテクトに、植物や造園材料に関する幅広い知識と適切な扱い方に関する素養が求められている。ではこうした知識と素養を、学習の出口すなわち実務への入口の段階でどこまで持つことが期待されているのか、またその期待に応えるためにどのような教育が望ましいのか。この古くて新しい問題に正面から取り組んでみようと言うのがこの特集の意図である。こうした立場からは、すでに造園のデザイン教育のあり方という特集があった。そこでは、高等専門教育と職能教育のあり方という基本的な問題が議論されていた。植物（系）教育でも議論されねばならないテーマである。

植物（系）教育でも、教育に期待する内容とレベルは、実務者と教育者で異なるだろう。受け手と送り手の属する世界が違うからである。もちろん両者の間の風通しをよくすることが必要だから、その前提として実務界と教育界の役割や目的の違いをまず理解し合わねばならない。それを試みたのが、座談会である。意識や価値観の異質性、同質性が浮き彫りにされた刺激的な座談会であった。この座談会で示された内容のなかでも、主として教育側の現状を取り上げ、その問題点の所在と今後の教育のあり方について、本稿以降の記事でいくつかの視点から議論している。ランドスケープの植物（系）教育のあり方は、時代に応じて議論し続けることが必要であることはデザイン教育と同様であるが、まとまった議論をする機会は学会の場でもそう多くはなかった。座談会と意見執筆による議論の展開という形で、第一段階として、教育側からの課題整理を試みたのが本特集の特徴である。

2. 生涯学習と期間限定教育

「若い人が植物を知らないのは、学習時間がまだ短いからで、あなたも卒業したての頃は同じような状況だったはずです。社会に出て仕事を通して覚えたことがいつの間にか蓄積され、それと比較するので新人が植物を知らないように感じるだけです。」この頁の左側冒頭の意見に対しこう反論しておきたい。

（勘）日本緑化センター（1996）：公共用緑化樹木品質寸法規格基準（案）の解説に収録されている樹木は156種である。これらについて、その形態、生理生態的特性、その特性を活かした使い方、適する土壌、管理方法、供給状況あるいは価格などについて、精通とはいわず、関係資料をいちいち見なくても、問われたその場である程度披露できる実務者がどのくらいいるのだろうか。実態調査をするまでもないだろう。これに庭木を加えて、芝草類、草花までを含めると、学習の対象となる植物の数は相当に多い。

国内に存在あるいは一国で使用する植物の種類が多い国は、中国とアメリカ合衆国であるが、これらの国では、植物のプロとして全国的に活躍する人以外は、限られた地域で仕事することが普通なので、造園家として知っておかねばならない植物の数はヨーロッパ並みでそう多くない。その点、狭い国土面積に比して植物種の多い日本では、全国的に仕事をするのが当たり前の普通の造園家になるにしても植物の学習には相当の努力が必要になる。

もちろん植物が好きで、短時間で驚くほどたくさんの植物を覚えることのできる人がいることは確かだ。しかしこうした人は経験値で2割以下であり、実務の社会に入っても他の人より植物に強い関心を持ち続け、造園に限らずそうした分野の仕事に就く傾向がある。したがって、学校時代の限られた期間内でしか植物を学ぶ機会を持てなかった、造園一般の仕事に就いた人に、植物に関する知識の量と質はそう期待できないし、実務に役立つレベルにまで教育しようとする消化不良を起こしてしまう。植物は生涯学習の部分がどうしても必要になる。

*明治大学農学部

3. 基礎教育とは植物の見方を身につけさせることか

デザイン教育の場合でもそうだが、「皮相的な知識より、学校では基礎をきちんと教えてほしい」という意見がある。造園からランドスケープへと、扱う対象や範囲が多様化しつつある現在、期間限定教育ではこうした情況すべてにきめ細かく対応できないばかりか、最新情報でかためた講義内容や教材もすぐに陳腐化してしまうから基礎が大事だという意見が出る。学校教育では、実務の世界ですぐ役立つというよりは、実務の世界にいつまでも役立つ知識と素養と技量を備えた人材を養成すべきだということなのであろう。教育側でも同様に考える。

高等教育とりわけ大学にあっては、教育者は研究者でもある。研究機関でも、国の研究機関は行政目的を達成するための研究、企業の研究所は会社の利潤追求のための研究、大学は文化創造のための研究とそれぞれ役割が違うので、大学人は、大学の研究がすぐに実務に役立たなくても仕方がないと思っている。むしろこれまで実務分野から、経験技術としての造園に、科学的な裏打ちをして欲しいと言われ続けてきた。大学の役割は造園を科学（サイエンス）にすることだと要求されてきた。その要求に応え、努力してきた結果が、あるいはその成果が、「造園」から「ランドスケープ」へと変貌させた一つの理由でもある。だから大学の研究が、いまの造園実務の世界にすぐには役立たないのは当然だとすら思っている。「科学」「技術」「実務」それぞれの分野の違いと役割の違いをはっきり認識した上での批判なら、耳を傾けようと思っている。

すぐに役立つ人材養成を期待しているのではなく、基礎的な素養しっかり積んだ人材が欲しいのだということであるなら、では植物に関する基礎的素養とは何かという議論ができる。もちろん植物の名前やその性質をよく知っていると知識量に価値があるのは当然として、植物に関する基礎的素養とは何か、それを身につける教育はどうあるべきかについての共通認識を持とうと言っているのである。植物教育の基本的目的は、植物の見方を身につけさせることにあると言っておきたい。

造園からランドスケープへと広がってきた過程で、植物の見方も多様化してきた。庭園、公園造りから都市緑化へと広がる中で、樹木についても庭木から緑化樹という見方が加わった。また環境や生態に配慮する空間整備が志向されるようになり、植物の持つ自然性が重視されるようになった。それまでの経験的、個人的な植物間が渾然一体のものであったとすれば、植物の見方に明瞭な力点が与えられ、それが判然と分化してきた。

植物の基礎教育とは、植物の見方にはいろいろな観点があり、それが植物のどのような性質からくるものなのか、環境との営み、人間との関わりの中のどの部分と関係するかを、示すことに他ならない。

4. 植物に対する美的、技術的、科学的な見方

「日本の街並みに合う都市園芸を展開することが必要だ」という考えに同感です。草花による配色デザインを勉強したいと思います」「エバーグリーンのスポーツターフを造るための草種混合の適正な比率を実験的に確かめたいのです」「校内にある崖下の水路でホタルの復元を試みたいので、斜面樹林の構造と水量、水質の関係を調べてみようと思います」これらは卒論のテーマについての学生の提案。

植物単体から生物、自然、環境へと視野を広げ、生物学的な手法だけでなく、工学など他分野の方法を取り込んで、立体的、水平的に見ようとする若い人が増えてきた。どこにそのような理由やきっかけがあったのだろう。議論をしていくと、植物に対する見方やとらえ方に違いがあることが見えてくる。

上記の事例の順でいえば、その違いは、植物に対して、美的、技術的、科学的な視軸のどの次元から接近するかの違いである。もちろんこの三つの異なる見方を、学生は意識していて、それぞれに整然と分かれるというのではなく、どれかにこだわっていることが聞いている方にも感じられるということである。それも文献を読んでそう考えるようになったという論理的なものとは別立ての、そのほうがピンとくる、あるいはそれに美しさを感じるというような、感覚と知覚に根ざした見方の違いのようである。

庭園の仕立て樹木や花壇、それに生け花まで含めると分かり易いが、植物をもっぱら美の対象としてみる見方がある。植物の生理的性質や生態的な秩序を別物としておいて、美しさを優先して植物を組み合わせで造形する。植物を感性であるいは心でみる見方である。この見方にたつと、管理されていない野性的な植生景観は遠くから眺めようとし、飼い馴らされた植物景観は目を近づけて見る。

造園建設の実務や緑化の現場では、植物は設計施工の材料として扱われる。石や金属と同じようにどう料理してやるかという技術の対象になる。手で触ってみるという見方である。完成した後では、植物の大きさとか量や面積、どうやって植えたかという技術に感動し、それを完成させた人間の英知や技能や努力を想像し評価する。この見方にたつと、繊細な姿形であろうと、荒々しい様相であろうと、近くから遠くから冷静、客観的に植物を見る。

アーボリカルチャーやランドスケープエコロジーの分野では、植物を科学の対象としてみる。誤解を恐れずにいえば頭で見ている。植物の営みや、環境との関わりに関心が強く、植物が病気になっていたり虫に喰われていても、これは大変だとか汚いかわず、病気の原因や虫の種類の方に興味を示す。この見方にたつと、自分の知らない、あるいは見たことのない植物の方に視線を投げる傾向を示す。

植物に対する見方の違いによって、得られる情報が異なるのを「理解させること」が教育である。

5. 分化する教育現場と消える造園

「理解させること」と書くと、教育は押しつけることだ誤解されるので説明を加えておきたい。大学を例にとると、つい最近までの大学教育は押しつけであった。教室での講義は、教授の研究発表の一形態であると考えられていた。学生は講義内容をひたすらノートに取り、試験の前には内容をよく理解できていようがいまいがひたすら暗記し、試験の答案に記憶内容を吐き出しあとは全部忘れてしまう。大学（教授）の研究は実務には役に立たないことになっているから、忘れてしまっても就職後には困らない。要領のいい学生や、本気で専門技術者になりたいと思っている学生は、公務員試験や資格取得のための勉強をする場をしっかりと別に確保している。教室での講義は、教授の専門領域の後継者を養成するためのインシエーションのようなものと割り切っている。だからいずれ研究者になりたいと考えている学生には有用でも、そうでない学生にとっては、大学は単位をそろえて卒業し、就職のためのブランドを身につけるためしか意味をもたなくなっていく。

大学への入学志願者である18歳人口の急減が目前に迫り、大学冬の時代が言われ始め、大学の淘汰と復権を大学自身に任せようと考えたのが、文部省による大学設置基準の大網化である。規制緩和の一つと見ても良い。一般教育と専門教育の境界を無くす、カリキュラムや学科組織の改編、研究教育内容の自己点検・自己評価も加わった。これを受けて、国公立大学の組織改編はほぼ終わり、私立大学の改革が進められている。

大学改革の詳細を紹介することがここでの目的ではないので、紙幅の制約からいささか乱暴に改革の結果を二つ示すと、一つは研究中心の大学と教育中心の大学に2極分化するだろうという変化。そして大学の講義も、理解させる講義と、役に立つ講義に分かれるだろうという予想。二つ目は、旧専門領域の解消と学際的な専門領域の新設が進むだろうという変化。その結果、これまでの物差しでは理解できない専門領域を学んだ学生が輩出されるという、これは受け入れる側の社会のとまどい。こうした新しい局面が徐々に現実化しつつある。

二つ目の結果は、大学から「造園」の消滅をもたらす。環境、生物、資源、生産、保全、創造、情報などのキーワードの組み合わせでこれまでの分野の再編が進むと、新たな組織名称の中に、造園が埋没してしまうからである。とりわけ総合性を目指してきた造園の分野は、こうした動向の波にのまれやすい。かつて実務の世界から、造園という名称は何とかなりませんかと問われたことがある。造園では庭造りのイメージが強すぎて、街づくり、環境整備へと発展せず、造園家の社会的地位が向上しないからというのが主な理由だった。これだという新名称が見つからないまま、いまランドスケープという表現を選んだ。

6. 教育と職能と職域の分離

教育機関には専門的な素養をもった有能な人材を世の中に送り出すという目標がある。送り出された側には基礎をきちんと身につけてほしいという期待がある。ではこの期待値と目標値が重なったとき、そこにどのようなランドスケープアーキテクト像が浮かび上がってくるのであろうか。かつては教育の現場と、造園という職能と、その能力を発揮する職域が密着していた。一本の線で繋がっていた。いまそれが分離しつつある。職域が拡大しつつある一方で造園の職域に他分野が入り込み、職能が細分化し逆に職能以外の領域も担当し、教育の体系も抽象化している。もはや期待値と目標値の交点を求めること自体が無意味な状況が生まれている。

座談会の中で、蓑茂氏（東京農業大学）は次のように発言している。初学者を卒業にまで到達させるには、動機づけ、解きほぐし、自信づけという教育のプロセスをたどることが重要である。重要な指摘であり同感である。では学生に、植物って面白い、面白い理由はここだ、植物が分かったような気がする、となって卒業し、仕事を通して植物に生涯関心を持ち続けるようにするには、どのような教育形態と方法があるのか。それには、教育、職能、職域の新たなネットワークを構築することが重要なのではあるまいか。

ネットワークの間を流れるものは、植物と人間の関わりといった理念的なものから、植物を扱うプロとしての心構えといった抽象的なもの、植物の科学、緑化の技術などの実体的なもの、事業内容、業務内容、専門家といった即物的なものなど、およそランドスケープの保全と整備と創出にかかるすべての情報とものが含まれる。

この情報とものを効果的に活用することが今後の教育に求められる。活用の形態には教室での講義、少人数による対話またセミナー形式などいろいろな形態がある。学校という場を離れた休暇中の体験学習という形態ももっと活用したい。新たな形態にふさわしい教材にも工夫が必要だろう。こうした具体的な教育技法のあり方を議論するための教育者と実務者の情報交換も必要だ。もちろんこの特集もそれへの試みの一つだ。

教育現場が研究者養成の大学院大学と、実務者養成の教育型大学に分化しても、過去の成果をもとに体系化された枠組みの中に、最新の情報を埋め込み、新たなものの見方と考え方の展開を披瀝するという教育内容は変らないだろう。しかし原理原則だけでは空間形成や環境形成はできない。植物や空間や環境に対するイメージを持たねばできないからである。イメージ形成のための感性をどう育てるかがランドスケープの教育分野では特に問われる。イメージは、現実と仮想の世界の間を自由に行き来することから生まれる。植物を屋内（教室）に持ち込み、人が屋外（フィールド）に出ている柔軟な手法の開発が待たれる。